

**地域学歴史文化研究センター
自己点検・評価報告書**

平成20年度

部局等の自己点検評価報告書

(地域学歴史文化研究センター)

1. 部局等の目的・目標

(1) 目的・目標

21世紀社会には、新たな学問体系が求められている。佐賀は19世紀後半、近代西欧文明・学問体系を先進受容した。それがどのような歴史文化を基盤としていたのか、また定着し展開したのかは、現在問われるべき重要な課題である。

佐賀大学は国立法人化を迎えるにあたり設定した、理念・中期計画・目標のなかに、「社会が要請する研究分野を担当する文理融合型の研究センター設置を目指す」、「地域住民・市民と大学との地域連携研究を推進し、新たに『地域学』を創出する」とある。

本センターはこれを実現するために、平成18年4月に学内共同利用機関として設立された。従って、本センターの目標は、1) 本学における文系基礎学の基盤整備を図り、充実・発展させること、2) 地域（佐賀）の歴史文化の固有性と普遍性を探究すること、3) 新たな学問体系としての地域学を創造すること、4) 本学の学問大系に新たな方向性（価値観・世界認識）を提示することを目指す。この目標実現のため、以下の具体的な研究活動・事業を展開していく。

(2) 基本的研究活動・事業

- 1) 地域（佐賀）の歴史文化資料の調査・収集と研究
- 2) プロジェクト（研究）の設定・企画・運営
- 3) 諸データベースの作成
- 4) 「研究紀要」「史料集」「図録」の刊行（企画・編纂）を行い、広く学会等へ調査・研究成果を公表していくこと
- 5) 講演（会）・講座・シンポジウムの開催（企画・設定）
- 6) 地域文化交流協定等による博物館等の特別展示の企画立案、共催事業の展開等により、本学（学生・教職員）及び地域社会へ研究成果を提供すること
- 7) ホームページによるタイムリーかつ簡便な地域歴史情報を広く提供すること

2. 部局等の概要

(1) 設立経緯

平成16年（2004）に学長経費による文系基礎学研究プロジェクトを開始した。佐賀大学附属図書館蔵小城鍋島文庫を調査・公開することと、平成15年2月に結ばれた佐賀大学と小城町との地域文化交流協定事業の支援として、平成16年8月に特別展「小城鍋島藩と島原の乱」を開催し、同図録を刊行した。平成17年には、特別展「小城鍋島家の近代」を開催し、同図録を刊行した。これらの歴史文化研究と地域貢献事業の発展上に、地域学歴史文化研究センターが、平成18年

4月に設立された。

(2) センターの概要

- 1) 本センターは、地域（佐賀）の歴史文化の固有性と本学文系基礎学研究の現状を踏まえて、考古学、国文・文献学、洋学・思想史、地域史・史料学の4研究部門に専任・併任教員を配置し、地域学創造に向けた研究をすすめている。
- 2) 各研究部門長は、部門のプロジェクトを運営し研究を推進する。
- 3) 研究拠点として、平成18年10月佐賀大学本庄キャンパスに竣工した菊楠シュライバー館を使用し、市民・学生向けの閲覧室・展示室を常備している。
- 4) 教職員構成は以下の通り（20年度末現在）

センター長	1名
専任教授	1名
専任准教授	1名
併任教員	1名
併任准教授	1名
併任講師	2名
特任教授	4名
非常勤博士研究員	1名
教務補佐員	2名

- 5) 部門別構成は以下の通り

考古学研究部門	重藤 輝行併任講師(部門長、文化教育学部)
国文・文献学研究部門	生馬 寛信併任教授(部門長、文化教育学部) 井上 敏幸特任教授(佐賀大学名誉教授)
地域史・資料学研究部門	伊藤 昭弘専任准教授(部門長) 石川 亮太併任准教授(経済学部) 鬼嶋 淳併任講師(文化教育学部)
洋学・思想史研究部門	青木 歳幸専任教授(部門長) 鈴木 一義特任教授(国立科学博物館理工学研究部主任研究官) 松田 清特任教授(京都大学大学院人間環境学研究科教授) 村上 隆特任教授(京都国立博物館保存修理指導室長)

3. 領域別の自己点検評価

(以下の事項に係る評価項目は、認証評価並びに中期目標項目に準拠したものを各部局等で設定する)

(1) 教育の領域

ア 教育目標・成果に関する事項

- ・本センターは研究センターであり、特に教育に関する目標を定めていないが、研究成果を応用した地域学教育を構想し、教養教育と連携しながらその構築をすすめた。

イ 教育内容・活動に関する事項

- ・地域との関係を重視した主題科目「地域と文明」の充実をはかる中期計画005の達成のため、部会の運営等にも積極的に関わった（専任1名が部会長）。
- ・教養教育に積極的に関与し、専任教員2名がそれぞれ前後期1コマずつ授業を担当した。

ウ 入学・卒業等に関する事項

- ・とくになし。

エ 教育環境に関する事項

- ・閲覧室に歴史・文化・郷土史関係の書籍・資料を配置し、学生に提供した。
- ・20年度末の展示室図書は、800冊整備した。

オ 学生支援に関する事項

- ・歴史に関する質問への調査・回答。卒論研究等への支援を随時行った。

カ その他教育に関する事項

- ・とくになし。

(2) 研究の領域

ア 学術・研究活動に関する事項

- ・本センターの学術・研究活動については、設立趣旨にのっとり、順調に成果をあげ、以下の理由から高く評価できる。

1) 小城市教育委員会と共同研究「黄檗僧と鍋島家の人々—小城の潮音・梅嶺の活躍—」を実施し、その成果を共催特別展開催及び図録の刊行により発表した。

○展示 「黄檗僧と鍋島家の人々—小城の潮音・梅嶺の活躍—」（10月18日～11月16日、於小城市歴史資料館）

○展示図録 『黄檗僧と鍋島家の人々—小城の潮音・梅嶺の活躍—』 A4判、124ページ。

掲載論考 錦織亮介（北九州大学名誉教授）「佐賀藩と黄檗宗」

井上敏幸（センター特任教授）「小城の黄檗僧—潮音と梅嶺—」

大園隆二郎（佐賀県立図書館近世資料編さん室長）「潮音を囲む人々と『五憲法』及び『五憲法かな書』」

福井尚寿（佐賀県立博物館・美術館学芸員）「普明寺所蔵の桂巖明幢筆十六羅漢図」

○関連講演会（於 小城市立歴史資料館）

井上敏幸「小城の黄檗僧潮音と梅嶺」（10月18日）

大園隆二郎「聖徳太子五憲法と潮音」（11月8日）

錦織亮介「佐賀県の黄檗美術」（11月15日）

2) 研究紀要3号（A4判、82ページ）を刊行し、専任教員及び非常勤博士研究員が研究成果を発表した。

伊藤昭弘「続 藩財政再考 —佐賀藩財政に関する一試論—」

野口朋隆（非常勤博士研究員）「佐賀藩における小城郡支配について —小城郡代との関連から—」

青木 歳幸「佐賀藩『医業免札姓名簿』について」

3) 第1回地域学シンポジウムを開催した（12月4日、於 佐賀大学、参加者89名）。

宮島敬一（経済学部教授）「地域史・説話と地域社会の形成—黒髪山為朝伝説を巡って—」

吉田伸之（東京大学教授）「単位地域の調査・研究・叙述—長野県下伊那における実践から—」

奥村弘（神戸大学教授）「地域歴史文化における大学の役割—神戸大学と小野市の連携を中心にして—」

青木歳幸・伊藤昭弘「佐賀大学地域学歴史文化研究センターの地域史研究の取り組み」

4) 世界遺産シンポジウムを佐賀県、佐賀市などと共に開催した（2月21日、於 佐賀大学、参加者約300名）

スチュアート・スマス（国際産業遺産保存委員会事務局長）「幕末佐賀遺産の世界遺産としての価値」

長野 還（佐賀大学名誉教授）「幕末佐賀遺産の概要」

パネルディスカッション「幕末佐賀が果たした日本近代化への役割と未来へのメッセージ」

5) 特別講演会「歴史的資料の科学的な分析法」を、2回にわたり開催した。

第1回（6月20日、於 佐賀大学）

田端正明（理工学部教授）「シンクロトロン光を用いる微量局所分析」

脇田久伸（福岡大学教授）「軽元素のX線吸収スペクトルのマッピングをめざす試み」

下山進（吉備国際大学教授）「文化財を科学の目で探る—文化財の非破壊分析法—」

第2回（9月10日、於 福岡大学）

中井泉（東京理科大学教授）「考古学における化学の役割」

平井昭司（武蔵工業大学教授）「文化財の分析及び評価」

田端正明「シンクロトロン光による歴史資料の分析」

6) 佐賀大学公開講座を企画し、佐賀県立佐賀城本丸歴史館との協力事業として開催した（於 佐賀県立佐賀城本丸歴史館）

青木歳幸「近世佐賀の地域性と文化」（12月20日）

杉谷 昭（佐賀県立佐賀城本丸歴史館館長）「幕末の鍋島閑叟」（1月17日）

生馬寛信「近世佐賀の教育」（2月21日）

7) 佐賀県内古文書調査を実施した。

○山本家文書（伊万里市立岩）

・ワークショップを月2回、のべ20回開催し、ボランティアと共に約3000点の史料を整理した。

8) ミニ展示を開催した（主なもの、於地域学歴史文化研究センター展示室）。

○海外交流と佐賀藩

○写真で見る旧制佐賀高校

- 9) 産学官連携事業として「佐賀県内歴史データベース構築事業」を提案し、佐賀県などと事業を開始した。事業の一環として、佐賀県立図書館との共同古文書調査（江藤兵部家史料・北川家史料）を8回実施した。
- 10) 小城市教委と共同で「千葉氏研究プロジェクト」を発足させ、23年度末の成果公開を目指すこととした。
- 11) 佐賀大学大学改革推進経費による研究プロジェクト「佐賀学」創成にむけた地域文化・歴史の総合的研究」を3年計画で開始し（6,000千円）、文化教育学部・経済学部などの教員を含めたグループ（13名）を結成して研究を推進した。

○研究会を8回開催し、研究推進を確認した。

○公開研究会を4回開催し、成果を発表した。

○佐賀の歴史文化遺産調査として、築地反射炉電磁波探査事業を実施し、推定たら炉遺構等を検出した。

○データベース関連基礎データ収集。洋学者人名データ360件余、漢学者人名データ347件余抽出した。

○考古学データベースに関して、唐津市、小城市等と打ち合わせをした。

○報告書を刊行した。

平成20年度活動報告書『「佐賀学」創成にむけた地域歴史文化の総合的研究—略称「佐賀学」創成プロジェクト—』（A4判、82ページ）

1 はじめに

2 「佐賀学」創成プロジェクト活動記録

3 公開研究会報告要旨

4 地域学シンポジウム 講演録

5 資料編

6 おわりに

- 12) 史料集『「小城藩日記」にみる近世佐賀医学・洋学史料（前編）』（B5判、257ページ、掲載史料点数776点）を刊行した。

イ 研究環境に関する事項

- 1) 教務補佐員2名を配置し、データベース作成、共同企画展等の補佐により事業を遂行した。
- 2) 競争的資金への応募を積極的に行った。

a) 20年度交付を受けた競争的資金（全て20年度科学研究費補助金）

○青木歳幸 基盤研究（B）「佐賀藩の反射炉築設・鉄製大砲鋳造技術に関する研究」（100千円、研究分担者）

○伊藤昭弘 若手研究（B）「近代日本における塩国家専売制の総合的研究」（800千円、研究代表者）

○亀井 森（教務補佐員） 特別研究促進費（基盤研究（C）相当）「幕末京坂文壇の諸相解明—台湾大学「長沢文庫」・東京大学「本居文庫」調査を中心に—」（1,000千円、研究代表者）

b) 21年度に向けた応募（全て21年度科学研究費補助金）

- 高崎 洋三（研究代表者） 新学術領域研究（研究領域提案型）「19世紀日本における西洋科学の受容と在来知の再編」（参加国内研究者87名）
 - 青木 歳幸（研究代表者） 基盤研究（C）（一般）「佐賀藩領医学史の総合的研究」
 - 伊藤 昭弘（研究代表者） 基盤研究（C）（一般）「日本近世の「藩」における特別会計とバランスシートの研究」
 - 野口 朋隆（研究代表者） 若手研究（B）「近世大名身分の成立と家格制の歴史的展開過程に関する研究」
 - 伊藤 昭弘（研究分担者） 基盤研究（S）「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」
- 3) 地元自治体・歴史関係諸団体との協力関係構築を進めた。
- 小城市教育委員会との地域文化交流事業を積極的に推進した。
 - 佐賀県立佐賀城本丸歴史館・佐賀県立図書館と共同事業を実施した。

（3）国際交流・社会貢献の領域

ア 大学、職員及び学生の国際交流に関する事項

- ・21年度科学研究費補助金・新学術領域研究応募に際し、オランダなど海外の研究者との協力体制構築の準備をすすめた。

イ 教育における社会連携・貢献に関する事項

- ・公開講座の実施
- ・講演会の実施
- ・小城市教育委員会や佐賀県立佐賀城本丸歴史館との共催展等で、講演会、ギャラリートークなどで、研究成果の市民向け公開に努めた。
- ・市民参加型の古文書整理ワークショップを毎月2回開催した。

ウ 研究における社会連携・貢献に関する事項

- ・小城市教育委員会や佐賀県立佐賀城本丸歴史館との共同研究をすすめ、展示や図録刊行などで地元への研究成果還元に努めた。
- ・地域史研究を推進している飯田市歴史研究所との連携を深めた。
- ・佐賀医学史研究会事務局を担当し、佐賀医学史研究を推進した。
- ・主な地域学関連講演活動・・5/31飯田市歴史研究所、6/20日本医史学会（佐倉）、6/25高木瀬公民館（佐賀市）、7/28学校図書館司書講習会（佐賀市）、11/18首都圏シーズ（東京都）、09/02/07佐賀県人会（東京）等

エ 大学開放に関する事項

- ・常設展示室でのミニ展示開催、閲覧室での図書開放等、開かれた大学・センターを目指している。

（4）組織運営の領域

ア 教育研究組織の編成・管理運営に関する事項

- ・専任教員2名、併任教員4名、特任教員4名、非常勤博士研究員1名、教務補佐員2名を配置し、センター長を中心とした円滑な組織運営・研究活動に努めた。また、文化教育学部や教養

教育機構、附属図書館等、他部局との連携も進めている。

イ 財務に関する事項

- ・経費の節減に努めた。

(5) 施設の領域

ア 施設、設備等の整備状況に関する事項

- ・菊楠シュライバー館の設備を最大限活用しているが、今後活動の拡大及び資料の増大による施設の狭隘化が、依然課題のままである。

イ 施設、設備等の利用状況に関する事項

- ・菊楠シュライバー館を拠点とし、研究・教育活動に努めている。また閲覧室・展示室は市民・学生によって利用されている。

ウ その他施設、設備等に関する事項

- ・貴重資料が保管されているので、セキュリティ確保のため、セコムに夜間警備を依頼している。

地域学歴史文化研究センター評価委員会

高崎 洋三 地域学歴史文化研究センター センター長（委員長）

青木 歳幸 同 副センター長、洋学・思想史研究部門長

生馬 寛信 同 国文・文献学研究部門長

重藤 輝行 同 考古学研究部門長

伊藤 昭弘 同 地域史・史料学研究部門長

岩松 要輔 財団法人鍋島報效会徵古館 館長

平成20年度佐賀大学地域学歴史文化研究センター自己点検・評価に関する意見書

氏名 岩 松 要 輔 

佐賀県の歴史・文化の流れのなかで、大きな高まりを見せるのは、邪馬台国との関係から吉野ヶ里遺跡などの古代の時期、次いで九州を三分支配した龍造寺隆信が活動した戦国時代、三番目に名君鍋島直正（閑叟）が活動した幕末・維新期であろう。

佐賀大学地域学歴史文化研究センターは、佐賀大学の国立法人化にあたりその目標とした、社会が要請する研究分野の文理融合型の研究センターの設置を目指し、地域住民・市民と大学との地域連携研究を進める地域学を創出することを目標として設置された。

佐賀県の歴史・文化の特色に対する佐賀大学地域学歴史文化研究センターの研究活動・事業が佐賀大学の学問体系に新たな方向性を提示することが求められる。

平成20年度の研究活動・事業内容の自己点検・評価に関して以下意見を述べさせてもらう。

(1)佐賀大学地域学歴史文化研究センターの活動内容

研究、展示、史料集作成、講演会・シンポジウムの開催、講義・学生への支援、地域連携、センターの市民への開放などが行われてきた。

①研究対象については、佐賀県の歴史・文化の大きな高まりである吉野ヶ里遺跡や龍造寺隆信の時代にも眼を向けてもらいたい。

②地域連携については、積み重ねられた小城歴史資料館、県立図書館、佐賀城本丸歴史館との連携活動があるが、その他の地域へも積極的に対応していただきたい。

③県内の小学校・中学校・高等学校の児童・生徒や教師との連携はもてないか。

④県内の歴史民俗研究会、郷土史研究同好会、古文書研究会などとの連携はもてないか。

⑤歴史資料（小城鍋島文庫、伊万里山本家文書、その他佐賀大学所蔵資料）の市民への開放は積極的に行ってもらいたい。

⑥国際交流による多面的な研究の推進を図る。（幕末の科学技術導入、近代化産業遺産など）

(2)組織運営及び施設について

上記の通り、佐賀大学地域学歴史文化研究センターの活動内容について、今後一層充実していくためには、現在の専任教員2名に併任・特任などの体制では十分ではない。施設についても、資料収集の点から拡充・新設が望まれる。